

# 桜花会 同窓会誌

---



東工大と言えばエレベーター？  
南1号館のエレベーターがリニューアルされました。



大岡山駅直上の東急病院の建築が急ピッチで進んでいます。

---

2007年9月発行

## 桜花会 同窓会誌 目次

■ 巻頭言	桜花会会長 古川 昌彦	2
■ 異動教員から		
東工大から九大へ	友岡 克彦	3
DIY	井川 和宣	4
■ 新任教員挨拶	和田 雄二	5
	荻原 仁志	6
■ 卒業生から		
フロンティア創造共同研究センターのご案内	大倉 一郎	7
あの山の向こうに	三輪 一元	8
■ 同窓会報告		
昭和 32 年応化会報告	大濱 博、栗田 久彌、島田 昭一	10
■ 最近の大学から		
南 1 号館は今	鈴木 寛治	10
桜花会幹事を務めて	碓屋 隆雄	12
女子学生と留学生	岡本 昌樹	13
■ 学年幹事から		15
■ 桜花会賞受賞者の声		17
■ 桜花会総会・工大祭企画のご案内		22

### 企業説明会にご協力いただける企業を募集しています！

10月27日(土)の桜花会工大祭企画にて、本年度も在校生向け  
の会社説明会を開催いたします。ご興味のある方は、事務局まで  
どうぞお気軽にお問い合わせ下さい。

## 巻頭言

桜花会会長 古川 昌彦

学科別同窓会の中には、大変活発に活動されている同窓会もありますが、総じて化学系といわれる学科は運営にご苦労されているようであります。一つには化学という学問や技術が多面的に進歩を遂げるために、先輩方が在籍されていた時代と現在が一つの糸で繋がりにくい状況に大学の機構がなっているという化学が持つ特性のためと思われまふ。しかし諸先輩方は皆心の中で、自分が青春時代お世話になり力を与えて下さった大学がいつでも世界の中で輝ける存在であり続けることを願ひ、少しでもお手伝いしたいという共通の思いをお持ちであります。これを上手に結び付けることが同窓会運営の基本でありまふ。事務局の方々、先生方も大変努力して下さり、電子メールを充実したり、同窓会誌を発行し中味の充実而努力して戴いております。その甲斐あつてか、少しずつですが良い感触が増えてきているようですが、地道な努力を続けて行かねばなりません。

蔵前工業会の拠点を大岡山に置くことが進行中でありまふ。学校と卒業生が有機的に連携することが益々重要となる時代になつて参ります。会員の皆様も気楽に大岡山に足を運んで戴きたいと思ひまふ。

## 異動教員から

昨年度に応用化学専攻から異動された友岡先生、井川先生のお二人から、東工大を去るにあたってのメッセージやご近況などをいただきました。専攻の教育研究にご尽力されてきた両先生には応用化学専攻一同、心から感謝するとともに、新天地でのご活躍をお祈りしております。

### ■ ■ 東工大から九大へ

#### 友岡 克彦（九州大学先導物質化学研究所・教授）

私は本年1月1日より東京工業大学を離れ、九州大学に移籍いたしました。これまで18年余りに渡ってお世話になりました東工大応用化学専攻、並びに桜花会の皆様へ本誌面を借りてご挨拶を申し上げます。

私は昭和の最後の年に慶應義塾大学大学院で学位を頂戴し、その後直ちに本学化学工学科応用化学コースの中井武教授の講座に助手として採用して頂きました。学外から「理工学の雄」と憧れていた東工大に職を得たことは私にとって大きな喜びであり、勇んで着任したことを鮮明に覚えております。しかしながら実際に仕事を始めてみますと研究や教育に関する価値観の違いなどに戸惑い、「何をすべきか」悩んだ時期も長くありました。結局のところは、優秀な東工大の学生諸君と共に、楽しく、活発に研究を行うことが出来、また素晴らしい先生方や同僚諸氏に恵まれて、充実した研究者生活を過ごさせて頂きました。今、改めて東工大にお世話になったことを感謝しております。

東工大において私は、「新しい有機合成反応の開発」とそれを利用した「生理活性天然物の合成」を主たる課題として研究して参りました。九大に移りましてもこれらの研究は継続して行いますが、それとともに最近始めました「自然界には存在しない特殊なキラル分子」の研究も展開していく予定でおります。大岡山で芽吹いた化学を遠く福岡で花咲かせたいと願っております。

さて東工大を離れるにあたりましては、古巣を去る感傷に浸る間もなく「研究室の引越」の問題に直面致しました。幸い、薬品や機器類の移動については、旧国立大学間の移設ということで比較的円滑に進めることが出来ましたが、問題は研究室の学生諸君のことです。ありがたいことに学生全員が行動を共にしてくれると申し出てくれましたが種々の条件もありますので、本年4月から夏までは、九大と東工大の二研究室体勢で研究を行って参りました。学生諸君には不便をお掛けしましたがこの時代、無料のインターネット TV 電話という便利なものが有るお陰で、常時二箇所を結び連絡を取り合うことで、どうかこの変則体勢を凌いで参りました。その後、ようやく諸条件が整い、この秋からは全

員が九大に集結できる運びとなりました。皆が新研究室で活躍してくれることを楽しみにしています。

研究室の引越や学生の処遇に関しましては応用化学専攻の諸先生に大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。また在職時にお世話になりました東工大の諸先生に厚く御礼申し上げます。

なお私、専攻のご配慮で東工大の連携教授に任命頂きましたので、まだ暫くは応用化学専攻の一員としてもお世話になります。今後ともどうか宜しく願い致します。

## ■ ■ DIY

### 井川 和宣（九州大学先導物質化学研究所・助教）

私が東京工業大学応用化学専攻・友岡研究室の助手に着任したのが平成 16 年 12 月、それから 2 年 5 ヶ月が経ち本年度 4 月に私は九州大学先導物質化学研究所の助教に転出致しました。桜花会誌に着任の挨拶を寄稿したことがつい先日のように思い出されます。今回の転出は、学生時代より御指導頂いている友岡克彦先生の九州大学教授への御栄転に伴うものであり、昔から至らないところだらけで大変申し訳なく思いながらも九州大学まで御一緒させて頂きました。

先導物質化学研究所の所属研究室は九州大学の複数のキャンパスに分かれています。友岡研究室が所在しているのは大学院の研究所で構成されている筑紫キャンパスです。筑紫キャンパスは博多駅から電車で 15 分と交通の便が良いものの、自衛隊基地×1、高校×2、中学校×3、小学校×2に囲まれており、近接するお店が少ないために買い物に不便なところが難点です。運動会シーズンには各校から大きな掛け声が飛び交い、真夏の蟬さながらのにぎわいになります。

4 月上旬には物品の搬入も済ませて研究室の立ち上げに取りかかったのですが、まず問題となったのは前研究室の置き土産です。そこには、紫外・可視分光光度計、蛍光分光光度計、分取りサイクル GPC システム、石英反応管などなど、目もくらむ様な宝物がたくさん有るのですが、それらが目を覆いたくなる様な負の遺産に囲まれて山積みされていました。そのため、はじめの半月はゴミの分別と廃棄作業の日々になり、大学の軽トラックを借りて研究室とゴミ集積場との間を何度も往復し、片っ端から処理をして行きました。

更地にしてしまえば、こっちのものです。そこからは大変ではあるけれども楽しい研究室の組み立て作業が始まりました。新たに購入した電気のこぎり、振動ドリル、ドライバードリルといった電気工具類を駆使して皆で大工作業に明け暮れ、友岡先生先導のもと部屋のペンキ塗りまでやりました。ゴールデンウィーク明けには少しずつ研究が進められるようになり、漸く落ち着いて来ま

したが、ここひと月で身に付いた物作り癖はなかなか抜けません。何か、足りないものがあると廃材や前研究室の残り物を漁り、時にはホームセンターに買い出しに行って器具を組み立てます。最近のお気に入り、自分たちで作成した光反応装置です。低圧水銀ランプ、トランス、石英反応管まではすぐに組み上がったのですが、冷却用の送風機が有りませんでした。そこで屋外の枯れ葉掃除で良く使用されているブロワを5千円程度で購入し、送風機として装置に組み込んでみたところなかなか調子が良く、十分にその機能を果たしてくれました。見た目は若干無骨ですが、この光反応装置で早速おもしろい結果が得られています。

最近市販の研究機器が充実し、以前よりも手軽に購入できるようになったものが沢山あります。けれども、自分たちで作成した方が安上がりで、より使い易いものになることも事実です。アイディアは出すだけタダ。今後も Do It Yourself の精神を忘れずに、九州での研究生活をバリバリがんばって行きます。

## 新任教員挨拶

■ ■ 和田 雄二 教授 (2007年4月 岡山大学大学院自然科学研究科より異動)

4月1日に着任いたしました和田雄二です。よろしくお願いたします。

わたしは、東工大の出身でしかも1985-1991年には森川・大塚研の助手でしたので、この2ヶ月の間に“おかえりなさい”というねぎらいの言葉を複数の方々からいただきました。感謝申し上げます。決してその親切な言葉に対して、異を唱えるつもりはないのですが、わたしには“戻った”という感覚はすでになく、今の東工大は新天地です。16年前に外に仕事を求め、1991-2005年まで大阪大学、さらに2006年には岡山大学にいました。それぞれで学んだこと、お会いした人々が今のわたしの宝です。

実は、昨年の桜花会同窓会誌に卒業生として、「大阪14年 - 一杯飲み屋さんでどう違う？東京と大阪」という文章を掲載していただきました。桜花会のHPでご覧いただけます。あの時は岡山に移ることが決まっており、大阪の思い出という気持ちで文章を書きました。当然、それから1年後に東工大にいるとは夢にも思っておりませんでした。

わたしが、現在、山中一郎准教授といっしょに運営している化学反応設計講座工業物理化学分野は、恩師、森川陽先生が最初の教員として着任された化学工学科の工業物理化学講座から発しています。その後、大塚潔先生が教育・研究に尽くされ、一昨年にご退任になった後を受けています。わたしが4年生と

して森川研究室に配属されたときには、森川、大塚両先生のもとで修士課程の学生5名、わたしを含めて2名の4年生という小所帯で、夜遅くまで実験研究と青春怒濤の出来事に励んでいました。実験装置もガスクロも手製の時代です。

現在、山中先生とは、研究室運営は共同で進めていますが、研究者としては、それぞれ新しい分野を創出する志を持っていますので、相互に完全独立して研究に取り組んでいます。山中先生には、新東工大システムの迷路の中で迷うわたしにいろいろな道具を貸していただいたり、大学の事務の仕組みを教えてくださいたりで、お世話になってばかりではありますが。

わたしは、ナノ物質と分子のハイブリッド化を可能とする化学を体系化し、光機能の設計・創出を試みています。さらに、新しい物質製造化学の手法として、マイクロ波を用いた有機・無機合成化学反応の探索・開発とその機構解明にチャレンジしています。桜花会の皆様にも興味を持っていただければ幸いです。

南1号館の6階は、とても懐かしく、まるで舞い戻ってきた感覚が、蘇ってきます。でも、着任2ヶ月経って、「俺はここに昔を捜しに来た訳じゃないぞ」、「行きつけの飲み屋さん(糸といいました)だって、もうないじゃないか」、「新世界を創れ」という声が聞こえてきます。未だガムテープで閉じられたままの段ボール箱に囲まれながら、そうだそれが俺の仕事だと思い悩んでいます。

桜花会の皆様、一度、南1号館の6階にお出でください。そこには、セピア色の思い出ではなく、見たこともない風景を植えておきますから。

#### ■ ■ 荻原 仁志 助教 (2007年3月着任)

私は本専攻の大塚 潔教授 (現東京工業大学名誉教授)・山中一郎助教授の御指導を受け、平成17年に博士課程を修了いたしました。その後、日本学術振興会特別研究員として北海道大学触媒化学研究センターの上田教授のもとでお世話になり、このたび平成19年3月より佐治研究室の助手 (同年4月より助教に移行) として採用していただきました。よろしく願いいたします。

学生時代は触媒反応による純水素合成から研究をスタートしました。実験を進めるにつれて思いも寄らない方向へ研究は展開していき、博士後期課程では無機合成を基礎とする新規ナノ材料の設計にトライし、電子顕微鏡写真に一喜一憂する日々 (憂の方が多かったですが…) が続きました。約2年間、北海道大学で修行をさせていただいたこともよい経験となりました。研究以外の業務がほとんどないポスドクの立場で、自由に実験に没頭する時間を通して得たものは大きかったと感じます。また、はじめて東工大を離れて研究を進める中で、刺激を受けることが多々ありました。

研究者としてスタート地点に立ったばかりの新人ですが、もしなにか自分に

取り柄があるとするならば、その多くは大塚・山中研究室での蓄積のお陰です。研究テーマの設定から具体的な実験の進め方、さらには研究室でいかに自覚的に時間を過ごすかまで、つねに熱心に（ときに厳しく）教えていただいたことは、当時よりも今の方がそのありがたさがわかります。私は縁あって再び東工大に戻ることができ、学生と関わりながら研究を進める仕事に就けたことに感謝しています。学生時代に先生方から教わったこと、受け取ったことを、なんとか自分の周りにはいる学生たちに渡していきたいと思っています。そのためにはまず自分自身が毎日をおろそかにすることなく、前進するための努力を怠ってはならないと痛感しております。

佐治研究室では電気化学・界面化学を背景にして、機能性薄膜の合成を試みています。これまでに経験のない実験も多く失敗と驚きの連続ですが、いずれ成果がオリジナリティのある研究に結実することを信じて、日々研究に励んでおります。不慣れなことばかりで御迷惑をお掛けするでしょうが、皆様方の御指導・御鞭撻をいただけると幸いです。

## 卒業生から

### ■ フロンティア創造共同研究センターのご案内

大倉 一郎 （東工大院生命理工）

昭和 43 年化学工学科、45 年修士、48 年博士卒（慶伊・小野研究室）

フロンティア創造共同研究センター長を拝命して 3 年目になります。前任者は秋鹿研一先生です。桜花会とも関係が深いと思われるので、今回は宣伝もかねてセンターの案内をさせていただきます。本センターははずかけ台キャンパスにあり、資源研の隣の S1、S2 という建物です。

本センターは、産学官共同研究プロジェクトの立ち上げ、その実施により、東工大発の技術による新産業創造を目指すもので、平成 10 年 4 月に設立されました。以来、学内外の支援を得て、その組織及び施設の拡充を図ってきました。現在、共同研究機能と研究・情報交流機能があります。共同研究機能は 4 分野あり、生命系、情報系、物質系、環境系です。研究・情報交流機能では、新たに客員教授として、ノーベル財団会長を予定しています。これは、グローバル化の進展の著しい今日、センターの国際評価と海外への広報をお願いするためです。国立大学が法人化され、共同研究の実施や研究成果の普及がその業務として位置づけられるとともに、産学官共同研究活動の自由度が増してきたことともあいまって、センターの重要性が従来以上に増しているといえます。また、



近い将来には、大岡山の VBL (ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー)、インキュベーションセンターと、すずかけ台の総合研究館と合併し、さらに充実した新センターが設立する予定です。

本センターのこれまでの共同研究プロジェクトからはすでに大きな成果が得られております。応化では碓屋隆雄先生が「超臨界流体反応技術の研究開発」のプロジェクトを実施されました。プロジェクトに参加した教員は研究科に復帰し、あるいは他機関に移り、本センターでの成果をさらに発展させています。また、本センターで培った産学連携活動の経験は全学的な展開をみせ、大学知的財産本部整備事業で高い評価を得て産学連携活動へと発展しています。

また、東工大で開発されたさまざまな新技術は、広く社会に還元され、新産業創造に役立てられています。センター1階に展示室があり、その一部を展示しています。「東工大新技術コーナー」の名称で呼ばれています。このコーナーでは、産学連携推進本部、VBL、インキュベーションセンターと理工学振興会と協力して、環境・バイオ・材料・情報などの各分野から生まれた、独自性の高い新技術やそれらの技術移転成果をタイムリーに展示・紹介しています。是非、ご覧ください。

なお、センターの概要は東工大ホームページにもありますのでご参照ください。

## ■ ■ あの山の向こうに

三輪 一元

平成9年化学工学科、平成11年修士卒 (脇原研究室)

6月2日、谷口・脇原研究室の同窓会が行われた。2年毎に開催されているこの会であるが、それでも久しぶりに会う懐かしい顔を見るとみな話が弾んだ。私が参加したのも6年振りのこと。その式中にスピーチをするOBの中に私もいた。みな仕事などの近況を話すのだが、私はギリギリまで何を話すべきか迷っていた。というの



右から2番目のチベット民族衣装 (正装) を着ているのが三輪 (OB 会にて)

は、5年前に仕事を辞め、それからずっと長い旅に出ていたのだ。話したいことはいくらでもある。しかし1、2分のスピーチで何が伝えられようか。結局その時は、旅をしていた、という事実だけを言うにとどまってしまった。だからこの場を借りて一つエピソードを書こうと思う。この5年で世界各地様々な

ところを回り、様々な人に会い、様々な素晴らしい思い出をもらった。この喜びの一部でもいいから人に伝えることがこれからの私の使命なのだろう。私が最も心惹かれた土地、チベットにおいて…。

…それはチベットの都、ラサにある馴染みのチベタン飲み屋から帰ろうとした時だ。帰り道が一緒になった客のオヤジがこっそり私に告げてきた。

「実は私の娘が今インド・ダラムサラの学校で勉強している。6年前に亡命させたのだが、それ以来娘の姿を見ていない。お前はその後ダラムサラへ行くのだろう。娘の学校を訪ね、成長した姿を写真に撮ってラサへ送ってくれ。」

これには説明を加えねばなるまい。中国共産党による実質的な植民地支配を受けている現在のチベットでは民族的な活動は禁止され、満足なチベット語の教育が受けられないため、ダライラマの亡命先であるインドへ子供を送りこみ、そちらで自由な教育を受けさせる人が多くいる。この行動は現体制では違法であり、見つかると殺されることもある。一生会えないかもしれないが、子供の将来を思ってそういうつらい選択をしたこの人たちの力になってやりたい！ 二つ返事で承諾し、オヤジの写真もそこで撮っておき、私はダラムサラへ向かった。

そしてその亡命チベット人の子どもが多く寄宿している学校へやって来た。そこの先生に事情を話し、その娘の名を告げるとすぐさま連れて来てくれた。15歳の小柄な女の子だった。ラサであなたのお父さんに会いましたよ、と写真を渡すと、それだけで止め処もなく涙が彼女の頬を伝った。

「少しの間だけでもいいからラサに帰ってお父さんお母さんに会いたいよ…」この子がヒマラヤ山脈を越え危険な逃避行をしたのは9歳のときだ。それからずっと親の温もりに触れることなく過ごしてきた身なら当然そう思うだろう。しかしパスポート無しの亡命の身分ではそれは少し難しいかも…とはとても言えず、ご両親はあなたがここで頑張って勉強し続けることを望んでいるはずだよ、と言うと、

「じゃあ一生懸命勉強して大学卒業してからラサへ帰る！」と力強く答えてくれた。

彼女が立派に学を修め、堂々と祖国へ凱旋できることを強く願いつつ、私は帰路についた。獅子の描かれたチベットの国旗がポタラ宮の上にはためくことを夢見ながら…。

## 同窓会報告

### ■ 昭和 32 年応化会報告

大濱 博（昭和 32 年卒 神原研究室）

栗田 久彌（昭和 33 年卒 岩倉研究室）

島田 昭一（理化会幹事）

昭和 32 年応化会は、平成 19 年 6 月 23 日(土)今年が卒業 50 周年に当たる記念合同クラス会の終了後、百年記念館第二会議室で昭和 32 年理化会と合同で開催された。応化会 19 名、理化会 8 名計 27 名の出席で盛況な会合であった。司会の挨拶のあと一番遠方からの参加者から卒業研究室、卒業後 50 年間と現況について報告があった。今尚学問に精進し経済学修士修了後にその上を目指している人、現役後もライフワークを続けながら幼少の頃よりの趣味を楽しんでいる人、技術の世界から一転して古文書の解読、博物館通いしている人、畠に緑を、公園や街に花をと晴耕雨読の人等皆生き生きと Successful Aging を重ねられている毎日が披露された。最後に志鷹義明君から「化石燃料の資源量及び輸送用燃料の将来」と題する話題提供がなされた。在来型石油生産のピーク時期は 2030 年前後 8 年の内に到来し、在来型石油、天然ガス資源は 21 世紀のうちに枯渇する。石炭は 300 年程度あるが石油、天然ガスのどの用途を代替するか？基本的には輸送用燃料と化学原料であろうか。それに対しては触媒技術などが重要である。さらに再生可能エネルギーが最後の救世主であるからその開発に力を尽くすべきで、その開発には現在の化石燃料から得ている富こそ充当すべきと指摘された。今後の予定について 3 年後に合同クラス会の後に再会するが新たに桜花会活動にも参加し交流を深めることを約束し散会した。

## 最近の大学から

### ■ 南 1 号館は今

鈴木 寛治（応用化学専攻 教授、平成 19 年度専攻長）

応用化学系学科の本拠であり、長い間、研究と教育の場となってきた南 1 号館（旧北棟）に関して新しい動きが起こってきたので、同窓会誌の紙面を借りて簡単に紹介しようと思います。南 1 号館（北棟）といえば、多くの会員は白くて洒落た意匠の長い建物をイメージされ、懐かしさを感じられるかと思いますが、もちろん年とともに印象は変わるものですから、若い会員にとっては薄汚

れたイメージの方が強いのかもかもしれません。

南1号館は中央通路を挟んで、東側は昭和39年に、西側は翌40年に竣工し、それぞれ今年で43年、42年を迎えました。故 清家清先生のデザインされた、当時としてはモダンなガラスブロックをはめ込んだ窓枠などもあって、この建物の親しみを感じておられる方も多いでしょう。世の中には歴史を刻むことによって愈々価値を増すものと、時とともに価値を下げ、役割を終えて消え去ってゆくものがあります。残念なことに南1号館は後者に属し、老朽化が進んだ今では研究棟としての役割を果たすことが困難な状況に立ち至っています。建物のあちこちに亀裂が目立ち、竣工当時は斬新と言われたガラスブロックもはずれ落ちる危険性が指摘され、安心して建物脇を歩けないような状況です。

大学の法人化が実施される以前から、応化系学科の各学科は概算要求などの機会を見ては、大学に対して建物の老朽化と、出入り口が一つしかなく避難路が確保されていない実験室など、建物そのものが抱えている問題を指摘し、建物の改修と新棟の建設を訴え続けてきました。しかしながら、建物が大きく、しかも比較的空部屋が多いため、南1号館は大岡山地区における新築・改修工事の際の一時避難場所として使用され、南1号館自体の改修・改築についてはこれまで放ったままにして置かれてきました。しかしながら本館の改修工事が一段落した今、漸く南1号館の改修問題が日の目を見ることになりました。

文部科学省が老朽化した建物の立替を認めない方針であることもあって、当初計画では耐震補強と内部の改修を行うことになっておりました。しかし工事に先立って行われた耐震強度の測定では、こともあろうに建物東半分の強度が大幅に不足しており、耐震補強する意味がないということが明らかになりました。何も知らないうちは良かったのですが、ことが明らかになった今は、地震があるたびに倒壊するのではないかと冷や冷やしております。死人や怪我人が出ないうちに安全な場所に移してもらうよう改めて大学に働きかけ、ここに至って漸く事が動き始めました。これまで長年にわたって努力してくださった方々に心より感謝する次第であります。



現在の南1号館

計画を大まかに記しますと、南1号館の西側を耐震補強した後、東側を取り壊し、東側とほぼ等しい床面積を確保するため、7階建てと5階建ての建物2棟を南1号館脇に新築することになります。建物の仕様などについては大学の

担当者と使用者の間で急ぎ検討する必要があります。その際最も大切と思われるのは、僅か40年間で使用に耐えなくなった南1号館の教訓を生かして、年を経ても安全かつ快適に実験を行うことができるよう、建物の構造、設備に十分配慮することでしょう。そのためには大きな初期投資を必要とするでしょうが、大学当局の英断に期待したいと思っています。

## ■桜花会幹事を務めて

碓屋 隆雄（応用化学専攻 教授）

平成17年4月より2年間、桜花会の大学側の幹事を務めて参りました。桜花会の運営も着実に軌道に乗りつつあります。これも卒業生の方々の多大なご支援の賜物と、大学で卒業生を送り出している教員の一人として感謝申し上げます。桜花会の運営に直接関わって初めて、同窓会に歴史の重さを感じております。

「桜花会」は、ご存知のように本学応用化学関連の学部、大学院の卒業生および教職員からなる同窓会であり、平成6年に伝統ある応用化学系関連学科の「応化会」を改称したものです。応用化学系同窓会は、昭和5年にそれまでの卒業生の集いを「応化同志会」として組織したことに端を発します。戦中、戦後の混乱期に同窓会は一時休止状態になりましたが、昭和54年に「応化会」として再興して、組織の拡大と充実を図ってきました。時代とともに化学や化学技術に対する厳しい社会の要請や、産業界におけるニーズの変化に対応して本学の大学組織も改編され、さらに大学院の重点化、独立行政法人化など、大学も応用化学系関連分野も大きな荒波にさらされ、それまで拡大してきた同窓会組織も見直しを迫られました。そのような背景から、平成6年に会の名称を「応化会」から母校の美しい桜並木を思い起こして頂く意味を込めて「桜花会」に改称しました。それまでの応化会の会員に加えて、現在の工学部化学工学科・応用化学コースと大学院理工学研究科・応用化学専攻、および物質科学専攻（応化系）の卒業生および教職員を会員として再々出発しております。

「桜花会」の初代会長には横山亮次氏が就任され、それまでの事業に加えて先輩方の特別講演会や会員と在校生とのバス旅行の実施など、会員と在校生との親睦をはかるための事業を行って参りました。さらに平成13年より会員からの寄付を基金として「桜花会教育奨励事業」を発足させ、大学院生の海外研究発表に対する支援金の供与など、在校生の研究教育の支援事業も重要な活動として実施しております。平成15年から2代目会長に就任した古川昌彦氏を中心に、毎年10月の工大祭の期間中に、応用化学専攻の研究室を会員にも開放して最先端の研究成果を紹介するとともに、定期的に同窓会誌を発行して会員の連

帯感を深めるなど、積極的に会員と在校生との交流を促進しております。さらに毎年3月に実施する卒業研究発表会では「桜花会賞」を制定して、優れた口頭発表とポスター発表をした学生を表彰しております。大学院生が桜花会賞の審査から表彰までを運営して、卒論発表会が学生同士の切磋琢磨の場ともなっております。このように桜花会は在校生にとっても重要な存在になってきており、大学側の幹事としていっそう盛り上げなければいけないと、考えておりました。

さて現在の応用化学専攻は、平成14年には本学の関連の化学専攻などとともに文部科学省21世紀COEプログラム〈化学・材料分野〉に採択され、先端の化学研究を通して優秀な学生の教育につとめて参りました。その成果が高く評価されて、平成19年度からは新たなグローバルCOEプログラム〈材料・化学〉の拠点として本学応用化学系6専攻が採択されました。これは全国13拠点の一つとしてその教育研究レベルの高さが認められたものです。国の内外での厳しい競争に打ち勝ち、かつ協調して力を発揮できるリーダーとなるべき学生を輩出させるために、応用化学専攻もその中核の専攻としてより高レベルの教育と研究を推進するためのいっそうの努力が求められております。

一方、昭和30年代の中頃に建てられた南1号館（北棟）はいよいよ老朽化が進み、本学の中で最も劣悪で不公平な教育研究環境となってきました。しかし、それもようやく耐震補強を含む改築工事により改善される見通しとなってきました。これまで多くの世界に通じる優秀な卒業生を送り出し、さらに各種COEプログラムに選定されるなど、世界の先頭で研究・教育を実践してきましたが、応用化学系専攻への風当たりはまだ非常に厳しいものがあります。この逆風を打ち破るためには、桜花会会員および在校生、教職員が今一度、一致団結して教育研究レベルの向上に努める必要があると考えております。今後とも会員の皆様の温かいご支援をいただきましたら幸いです。折に触れて桜花会ホームページ (<http://www.apc.titech.ac.jp/~okakai/>) もどうぞご覧ください。

## ■女子学生と留学生

岡本 昌樹（応用化学専攻 准教授）

「男女比が1:1に！」今年度最初の研究室ニュースの見出しです。「平成14年から研究室を運営するようになって、初めて研究室内の男女比が世間並みに達しました。」世間では男女比が1:1であることは当たり前のことですが、東工大の中では異常な比率です。私が学部学生の時には、化学工学科・応用化学コースの女性は34名中1名でした。最近では女子学生が増えてきているという実

感はありましたが、半数になるとは正直驚きました。そこで、ここ数年の応用化学コースの女子学生の人数と割合を調べてみると（表）、女性の割合は平成14年の33%を除くと20%前後で推移していることがわかります。また、東工大の学部生全体では11%（平成18年度）であることから、応化コースには女子学生が多く、大学全体と比べて割合で約2倍在籍していることとなります。それよりもはるかに多い5割という割合は、やはり特異です。たまたま確率の問題で5割になったのかわかりませんが、研究室に女性が多いと研究室所属の時に女性が選びやすいことが原因かもしれません。

研究室の話はそれくらいにして、表からここ数年の間に留学生の割合が大きく変化をしていることがわかります。平成18年度の学年以降、留学生数が急激に増加し、1割以上の留学生が在籍しています。学部全体で見ても6%（平成18年度）の割合で留学生が在籍しています。この理由の一つに中国からの私費留学生の急増があげられます。中国の瀋陽に海外留学することを目的とした高等学校が開校され、毎年多くの卒業生が東工大に入ってきています。この高校を卒業した学生によると、東工大以外の日本の大学にも多くの卒業生が進学しているそうです。ここ数年の間に応化コースに所属した留学生の多くはこの高校の出身です。大学側にも留学生を増やしたいという考えがあり、また、留学生に定員がないため、今後も留学生が増えるでしょう。優秀な留学生が増えることは、日本人学生にもよい影響を与えます。ただ、中国以外の国や他の高校からも多くの学生が受験して欲しいものです。また、学生実験などでは急激な人数の増加に実験装置の数が対応できず、一部で問題が生じています。定員がないということも再考する必要があるのかもしれません。ところで、留学生の大半が女性であるということは何を意味しているのでしょうか。男性はどうしたのか、気になります。

表 3月卒論発表者中の女性および留学生の割合（平成20、21年は予定数）

年度	卒論発表者人数	女性	割合	留学生（女性）	割合
平成14	42	14	33%	1(0)	2%
平成15	37	8	22%	0(0)	0%
平成16	33	8	24%	0(0)	0%
平成17	39	6	15%	1(1)	3%
平成18	44	8	18%	6(4)	14%
平成19	44	9	20%	3(2)	7%
平成20	46	11	24%	8(5)	17%
平成21	42	4	10%	4(4)	10%

## 学年幹事から

桜花会には卒業年度ごとに「学年幹事」の方がいらっしゃいますが、これまでこの制度を活かした活動をほとんど行っておりませんでした。学年幹事の方の顔が見えるようにすることで、各世代で桜花会をより身近に感じていただくとともに、将来的には卒業15周年、20周年など、区切りの年度での学年同窓会の開催を桜花会が支援するなどの形につながればと考え、その手始めとして今回何人かの学年幹事の方に、近況などをお寄せいただきました。

### ◆田村 吉隆（森永乳業株式会社）昭和42年化学工学科卒（慶伊研究室）

この度、6月1日付けで執行役員を解かれ、研究・開発担当常務付きとなりました。業務も事業部を離れ、今週から弊社さがみ野の研究所勤務になりました。弊社研究開発担当常務からの業務指示は、今までの経験・知識を有効活用できる分野での指導・支援並びにapplication know howを伴う指導・支援、及び営業活動をお願いするとなっております。

研究所で使っていただけることに大変感謝しております。その上、皆様のお役に立てれば嬉しく、精一杯弊社の研究開発を支援して参る所存です。今後とも一層のご指導・ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



### ◆楠 真（株式会社野村総合研究所）

昭和56年化学工学科（慶伊・小野研究室）昭和58年修士卒（小野研究室）

東工大では毎晩実験の日々を過ごしましたが、社会人になって25年。苦しくてもつらくても、目前に立ちふさがる課題に対して正攻法でぶつかってきました。研究室で先生方に教えていただいたことです。気づいてみればずいぶんと違うフィールドに足を踏み入れてきたものです。現在は金融関連のITソリューションビジネスを担当しております。今日、金融はITビジネスそのものです。あちこちで東工大の卒業生が金融のインフラを支えています。



◆佐用 昇（高砂香料工業株式会社）

昭和59年博士卒（石川・中井研究室）

高砂香料工業(株)に入社して23年たちました。途中2年間本社の企画部に異動しましたが、その期間を除いて研究所で有機合成に携わってきました。遷移金属錯体触媒を用いる不斉水素化反応の開発を主に行っています。



◆南 一郎（岩手大学）昭和61年博士卒（辻・山本研究室）

同期の皆さん、そろそろ50歳ですね。2005年の同窓会から2年が経ちました。来年の春にまた大岡山で呑みましょう。名簿にない旧友の消息をご存じでしたらお知らせください。

◆御子柴 尚（富士フイルム株式会社）

昭和60年化学工学科、昭和62年修士卒（中井研究室）

箱根の麓にある富士フイルムに就職して20年になります。神奈川県の間ではありませんが、新幹線が通り東京へのアクセスも良いこの地に住み着いております。大学時代からの専門を生かして、研究所で、機能性化合物の開発を行っております。休日は、これも大学時代からの趣味である合唱を続けております。

◆矢島 知子（お茶の水女子大学）

平成5年化学工学科、平成7年修士、  
平成9年博士卒（三上研究室）

私たちの学年は、昨年、卒業以来10余年経って初めて同期会がありました。皆もっとおじさんになったかと思っていたら、予想に反して、卒業時とあまり変わらない若々しさで、ビックリしました。



※これを機に、「学年幹事なので同窓会を企画したい」「私の学年も桜花会誌で紹介して欲しい」などのご要望、ご質問などがございましたら桜花会事務局までお寄せいただければ幸いです。

## 桜花会賞受賞者の声

桜花会では毎年、大学院博士課程の学生が選考した優秀な卒業論文発表者に対して桜花会賞を授与しています。平成19年3月の桜花会賞受賞者に、受賞の感想や近況などを綴ってもらいました。

### ◆田邊 暢偉（高橋・土井研究室）

この度は桜花会賞をいただきありがとうございました。正直なところ、あまり発表などが得意とはいえない自分が、受賞できるなどとは考えていなかったもので、自分が選ばれたときは寝耳に水という言葉がぴったり来るような状態でした。

思えば、研究室に所属してから早くも一年以上の月日が経つのですが、あっという間、とても長い間だとも言えるような、新鮮で非常に密度の高い日々であった、というように感じています。その間、教授の方々や諸先輩たち、同期の仲間に支えられ、後押しされ、どうにかやり続けることができたと考えております。

一年間以上を研究室の中で過ごし、ようやくと広大に広がる化学の世界の入り口に立って、改めて化学の世界に入ることを決めてよかったとしみじみ感じています。その動機は元をただせば非常に単純なものでした。はじめに化学の世界にあこがれるようになったのは中学生のころで、化学の授業の中で行った炎色反応を始めて見た時でした。そのときの未知なる物に出会うことの感動が、それまで機械系に進みたいと考えていた自分を大きく方向転換させ、化学の道に入りたいと考えるようになりました。その後も、東工大への入学、応用化学コースへの進学、研究室に入るまでの間、ずっと自分の進む道の指針になり続けていたように思います。

青二才の自分がこんなことを言うのもなんだとは思いますが、あんなことをしたらどうなるだろうとか、そんなことができたらいいな、などといったまるで子供のようなきれいな心の輝きを持った人たちが集まる化学の世界に入るには、動機はシンプルなもの逆によかったと思います。そして今後も、自分の知的好奇心やチャレンジスピリッツが欲するままに突き進むことが、自分にとっていい事であると信じ、また、そのことが化学の世界にとってもほんの少しは役に立つことになるように信じて、この果ての見えない世界を歩み続けたいと思います。

#### ◆和田 慎太（脇原研究室）

卒業論文発表から3ヶ月が経とうとしています。学年がまた1つ上がり、大学院生の自覚を持って日々授業、研究に勤しんでいます。

去年の4月、私は応化コースの2人の友達と共に脇原研究室に入りました。最初、学部3年生までの自由な大学生気分が抜けきらないうちは、毎日よく分からない研究と向き合うのは非常にストレスのたまることでした。実験では、器具を壊したり先輩のサンプルをダメにしてしまったりと、数々の失敗をやったのけました。そんな中でも諸先輩方は、寛容で的確なアドバイスでもって研究面、生活面の両方で大きな支えとなって下さいました。おかげで大学院入試や、try & error で全く良い結果の出ない研究も辛抱強く乗り越えていくことができ、徐々に化学や研究することの面白さを理解できるようになっていきました。卒論発表の前日には、5分間とはいえ大人数の前で発表するのが初めての私たちのために研究室の先輩全員で予行練習に付き合ってください、結果、桜花会賞という名誉ある賞を頂くことができました。私たちは脇原先生の最後の教え子となるわけですが、そのような年に賞を取ることができ、非常に満足しています。賞品の図書券を受け取った後、脇原先生とがっしり握手し喜びを分かち合ったのをよく覚えています。

いろいろ大変な1年でしたが、最近になってその成果が見え始めてきた気がします。論文を読んでもスムーズに理解できるようになってきたし、電気化学や無機化学などの講義を聴いていても理解度が格段に深まっており、自分が進歩しているということを感じています。研究に対してもそれ以外のことにも、自分の思ったことをどんどんやる、そんな能動的な姿勢で修士課程の2年間を充実したものにしていきたいと思います。

#### ◆田澤 慧（山中研究室）

卒業研究をした去年1年間を振り返ると、本当にあっという間に過ぎていったと思います。研究室での生活は学部3年までの授業中心の生活とはまったく違い、新しい経験の連続でした。はじめは基本的な研究室でのルールや器具の扱いなどを先輩方に習い、自分の実験台を作りました。実験をやるようになってからは、再現性に苦戦し、予想外の結果へ対応に困り、いろいろな失敗からたくさんのことを学びました。その中で、日々痛感したのは、自分の知識と実験技術の未熟さです。一年しか学年が違わない修士1年の先輩と比べても大きな隔たりがあり、尊敬すると同時に自分も先輩のようになれるよう頑張ろうと思いました。

卒業研究ではなかなか結果がでずに、2月後半のぎりぎりまで実験を行いました。結果がでないことに対する焦りと不安はありましたが、実験を集中して

できたので毎日がとても充実していました。そして何とか実験を終えて卒論発表の原稿を作り、発表練習を始めたのですが、原稿の覚えられなさ具合には自分のことながらあきれてしまいました。原稿を覚えるだけでもかなりの苦戦した上に、詰まらず話すことがなかなかできなかったため、発表時間4分間にすべて収められるようになったのは発表当日の朝のことでした。しかし、本番の発表では多少詰まりはしたものの、ほぼ4分ちょうどに収めることができ、自分でもかなりの驚きでした。午後のポスターセッションでは、発表の練習で手一杯だったためあまり余裕を持って準備ができず、納得できるほど説明がうまくできたとは思えません。

それでも無事に卒論発表を終え、さらには桜花会賞までいただいたのは、先生や先輩方のおかげだと思います。研究のみならず、様々な場所での確なご助言をいただき、支えていただいたからこそ、何とか卒論発表までこぎつけることが出来ました。

学部を卒業し修士課程に進学した現在、今までよりもさらに実験と勉強を重ね、僕が4年生のときに見た頼れる先輩方の姿に少しでも近づけるように、あわよくば追い越せるようにこれからも頑張っていきたいと思います。まだまだ至らぬところばかりですが、これからもどうぞよろしくお願いします。

#### ◆糸永 幸平（山本研究室）

私が幸運にも賞をいただいてからはや4ヶ月が経ち、また忙しい研究生生活を送っております。

振り返りますと去年の4月、私は人材交流プログラムにより3年間の期限付きで新設された山本研究室に配属となりました。当初は碓屋・桑田研究室を希望しておりましたが、定員を超えていることや、山本先生の研究内容が反応開発だったことなどから、自ら山本研究室を希望したものです。そのころは、指導してくださる山本先生や名古屋大学の先輩方がどのような方なのかはもちろんよくわからず、ただ来るべき研究生生活がどんなものかをあれこれ想像して、期待感で胸を膨らませていたことを思い出します。

研究室生活が始まると、山本先生は4年生3人に、3つのテーマを提示しました。糖の類縁体合成、パラジウムを用いた触媒反応、それからモリブデンを用いた芳香環 C-H の触媒的な活性化でした。もともと触媒開発をやりたくて山本研究室にきたことと、あまり研究されていないということに惹かれて、私はまっさきにモリブデンを選びました。

自分で研究テーマを選んで、研究生生活はさぞ楽しいことだろうと思ったのも束の間、いざ研究をはじめると、自分がいかにできないかを痛感させられ、想像以上に厳しく指導を受けました。まったく研究どころではなく、とにかく基

本的な実験操作やさまざまな基礎知識を吸収していくことで精一杯でした。そのときはとても大変ではありましたが、これは将来の自分に必要な投資なんだ、習熟すればもっとスムーズにできるはずだ、と考へ、また研究とはそもそも積み重ね積み重ねて成果をあげるものなのだとも思ひ、どうにかふんばって勉強を続けることができました。

そしていま、1年前の自分と比べて格段に成長した実感があります。それは化学の知識や研究スキルだけではなく、ひとつのことをやり遂げる大切さ、1人1テーマゆえに学べた責任感、仲間と協調して、ときに助け合い、ときに競い合うことの価値を、これまで以上に感じたことです。

これもひとえに、この充実した日々があればこそで、その努力が実って桜花会賞をいただけたのかなあ、と今は考へております。ただ正直なところ、受賞にふさわしいと胸を張って言える自信はありませんので、慢心することなく今後も努力を重ね、桜花会賞の名に恥じぬように、さらに成長していこうと決意を新たにしております。

末筆ですが、これまでさまざまにご指導くださいました山本先生、諸先輩方と、一緒に切磋琢磨してきた同輩、支えてくれた家族にこの場を借りて感謝いたします。

#### ◆笠井 幸司（総合理工学研究科 岩本研究室）

まず初めに、桜花会賞をいただけたことに心からの感謝を申し上げます。

さて、受賞者のコメントということですが、私は今所属している研究室で得たものについて書きたいと思ひます。

私は4年次進級の段階で希望した結果、すずかけ台に配属となりました。研究室で4年生は一人という状況で色々なことを学びました。研究に関する知識などはもちろんのことですが、私が一年間で学んだことは競争心の重要性でした。

すずかけ台という場所では学部から上がってくる人間は少なく、他大から来る人がほとんどです。私の研究室もそうです。そこで私が感じたこと、というよりも私の中に生まれたものは競争心でした。ひどく負けず嫌いな私は、内部から来た人間として負けたくないと思ひ、一年間を過ごしました。そういった気持ちは次第に大学外にも向き、他の研究グループなどにも負けたくないという気持ちが芽生えてきました。学会や講演会等に参加するたびにモチベーションが生まれてくるのを感じていましたし、それが他のグループの研究内容について学び知識を増やすことにもつながっていたと思ひます。

東工大生は一般にプライドをあまり持っていない（東大生にくらべて）と言われますが、それは良い事でもあるし悪い事でもあると思ひます。大きすぎる

プライドは成長の妨げになるでしょうし、かといってプライドが無ければ競争心も生まれにくいでしょう。そして競争心こそが私にとって大学院生活の原動力となっている以上、ある程度のプライドは必須だと思います。

これが、私が卒業研究生として一年間で学んだことです。これからの将来も院生であれ、社会人であれ、負けたくないという競争心を持って頑張っていきたいと考えています。

最後になりましたが、卒研発表製作に際してお世話になりました、担当教員である岩本正和教授を初めとして、4年間ご指導いただきました応化コースの先生方、同研究室の石谷暖郎講師、田中敏弘助教、また助手として様々な場面で直接ご指導いただきました現京都大学の山本孝助教に深く感謝いたします。

#### ◆時光 亮一（総合理工学研究科 山本隆一研究室）

卒業研究発表におきまして、桜花会賞に選んでいただき、誠にありがとうございました。私の研究テーマは高分子に関するものなので、受賞を聞いたときには驚きました。思っていたより平常心で発表できたことが良かったのではないかと思います。ポスター発表の際に受けた質問は研究に対する考え方や今後の研究における指針、学会で発表する際の参考になりました。頂いた図書カードは化学系の本の購入に充てさせていただきます。

さて私が所属する山本研究室は良い意味で比較的自由的な研究室で、私にとっては適した環境かもしれません。先輩、後輩といった関係をあまり感じず、元気に日々生活しています。また4年生のときは研究室に同学年の人がおらず少し寂しかったのですが、今は同学年の人が4人研究室に入ってきて仲良くすごしています。現在の私の研究は4年生からの研究の続きで、更なる結果を出そうと努力しています。研究に関しては自分で考え、行き詰ったときには色々な論文を読んでヒントを得るという方法を当然ながらとっています。もちろん先輩方や先生方とも話したりしています。とはいっても、私のマイペースな性格のせい（?）、なかなか進まない場合もあり、ただ今苦戦中といったところです。

早いものですずかけ台のキャンパスに通って2年目になりました。今年は自分の将来のことをもっと真剣に考えなければいけないと思っています。前年、4年生の時には自分ではうまくいかなかったと思った実験結果でも、山本先生はそこから新しい研究に広げてくださいました。当然ながら、自分の未熟さと凡庸さ、そして感性の違いを感じるときもありました。今の私はとにかく手を動かし、考え、努力するのみです。

これからも堂々と（桜花会賞の受賞理由）、そして品格のある人間になれるよう精進していく所存です。

## 桜花会総会・工大祭企画のご案内

今年度も工大祭にあわせて桜花会総会と各種企画を開催いたします。桜花会会員の皆様には、ぜひこの機会にご来学いただき、旧交をあたためるとともに、学生や教員とも交流を深めていただければと存じます。

工大祭桜花会企画では講演会ののち、研究室開放、ポスター展示を予定しております。また、本年度も卒業生による企業説明会を開催する予定です。ご協力いただける会員の方は桜花会事務局までご連絡いただけますと幸いです。

なお企画の詳細につきましては桜花会ホームページに掲載いたしますのでご覧下さい。準備の都合上、ご参加いただける方は、1. ご氏名、2. 総会の出欠、3. パーティーの出欠を桜花会事務局まで事前にお知らせいただけますと幸いです。

### ★★★桜花会総会・講演会など★★★

日時 10月27日(土) 13時-14時 総会  
14時-15時 講演会 中井武先生  
(東京工業大学名誉教授)  
「化学、大学、教育」  
15時-16時 OBによる学生向け企業説明会  
終了後 ビアパーティー  
(会費2,000円を当日会場にて申し受けます)

場所 東京工業大学 大岡山南1号館 2階209会議室

### ★★★研究室開放・ポスター展示★★★

日時 10月27日(土)、28日(日) 11時-17時

場所 東京工業大学 大岡山西4号館 2階学生実験室

### 卒業祝賀会のご案内

平成20年3月26日(水)予定

詳細は後日桜花会ホームページ、電子メールなどでご案内いたします。

## —あとがき—

7月にお届けする予定の桜花会誌でしたが、事務局の不手際などのため、2ヶ月ほど発行が遅れてしまいました。お詫び申し上げます。さて桜花会では毎年郵便振込にて会費納入をお願いしておりますが、その振込用紙の通信欄にご近況などをお書きくださる会員の方が結構いらっしゃいます。事務局だけで楽しんで(?)いるのももったいないと思い、いくつかのメッセージをここでご紹介したいと思います。振込の際にはどうぞ一言お書き添えいただければと思います。

**糸井 滋** (S22 久保研) 水彩画を描く日々で、今年も蔵前絵画会展に出品しました。元気で82才を迎えました。

**牧 廣** (S23 金丸研) 通産省からの委託で開発したプラスチック製 LPG ボンベの実用化の努力をしています。

**春木 浩** (S27) この春には近くの阪大基礎工主催の公開講座で何年か振りで先端科学を受講。

**小谷野 和郎** (S33 修士・金丸研) 自宅 SOHO にてまだ分子計算などやっております。

**志鷹 義明** (S33 森川研) 元気で暮らしています。

**市川 惇信** (S33 博士・水野研) 本年7月にすべての公務を退任し、悠々自適となりました。

**田嶋 尚志** (S34 金丸研) 健在。

**山本 克行** (S34 斯波研) 125歳まで生きて「ありがとう」を世界中に広める。99歳でフルマラソンをやりギネスブックに載せる。今年6月あきるの(学芸大学内)で12時間走…54km 走破…

ビリでした。マラソンは「ありがとう」を広める手段です。

**太平 雅也** (S37) ゴルフと山歩きのためのウォーキング。

**中林 宣男** (S39 博士・岩倉研) 講演会は講師として楽しませて頂きました。又こんな機会を頂ければと思います。

**斉藤 正巳** (S41 修士・舟木研) 目下改装工事中で忙しい毎日を送っています。

**栗原 重紘** (S44 修士) ISO14001 環境マネジメントシステムの講師を担当しています。

**橋本 恵** (S47 修士) オランダ駐在中。

**君島 孝尚** (S52 修士) 4月から技術開発本部で、研究所と研修所をマネジメントしています。後輩も活躍しています。

**笹沼 裕二** (S57 高分子修士) お陰様で元気にしております。

**山下 恭吾** (S59 修士・飯島研) 自宅のノートパソコンが故障して往生しています。



平成 19、20 年度桜花会事務局

〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1-S1-6

東京工業大学 大学院理工学研究科 応用化学専攻 鈴木寛治

電話 03-5734-2148 Fax 03-5734-3913

E-mail: [cherry@apc.titech.ac.jp](mailto:cherry@apc.titech.ac.jp)

桜花会ホームページ <http://www.apc.titech.ac.jp/~okakai/>